

シリーズ第10回 この本をあなたにも薦めたい

『かくもみごとな日本人』 林 望著

今回は趣向を変え、毛色の変わったものを紹介します。ひとことで言えば、あのリンボウ先生が著した日本人列伝です。

リンボウ先生、すなわち「林 望」をご存知ならば話は早い、とにかくある種の確固たるスタイルを持っている人物。その生き方はいうに及ばず、書くものも今どきめずらしい擬古のダンディズムに貫かれている。

列伝は『まえがき』…というような平たいものでは始まらない。それは『巻端に叙す』でなければならず、その中身は昨今の日本語で表現しうる最高の漢文脈を生かしている。とはいえ

読みにくい訳ではなく、やや調子高く歯切れの良いリズムが、一気に呵成の読了を促す。

こうしてリンボウ先生は言う。

当今は日本人も自信喪失の体で、また政治家などもろくな人材を見出さないという混迷の時代にあって、いやいや自信を失うには及ばないぞ、「元気出せ！ 日本人」と、エールを送るという心で書いたのである。

ひとり800字で70人というこの本のスタイルは、初出が広告コラムであったことによる。読みやすいのは勿

論のこと、先覚者を知る良い手引書ともなっている。興味をひかれた人物がいたなら終わりのページの参考資料一覧によって、その人物を更に探求して欲しい。またこの列伝を読み通すことによって湧いてくるであろう、日本人としての感慨を味わって欲しい。リンボウ先生の硬く締まった文章の快さを味わって欲しい。

枕頭に置き、今日の一冊を読んで心たいらかに眠りに就く。そのような洒落た読み方もおすすめである。

財団法人 伊藤青少年育成奨学会
常務理事 田代 久美子



『かくもみごとな日本人』
著者：林 望
出版社：光文社

スポーツ振興支援

.....最近いただいた部活からのお便りです。

岐阜県立長良高等学校 男子バレーボール部

キャプテン 伊藤康平



自動リプレイ装置を使用して
実際に映像として自分の姿を見ることは、とても勉強になります。テレビなどで日本を代表する選手達のプレーを見て、参考にしようといつも考えていますが、自分の姿を実際に見ないことには、そのプレーに近づけることができたかを知る事ができません。トップ選手のプレーだけでなく、先生が指導してくださったことさえ上手に再現するのは、かなり難しいです。しかし、自動リプレイ装置の映像をプロジェクターを通して見ることで、自分の課題が一目で理解できます。他の部活動強豪校と比較して、練習時間を確保できない自分たちにとって、練習の質を上げることが、何より重要になります。そういった意味でも、自動リプレイ装置の映像は、とても役に立ちます。初めて自分の映像を見たとき、自分自身が思い描いていた選手像と映し出された映像の差の大きさに、正直とても驚きました。その時、頭で分かっていることを体で再現することが大変だと痛感しました。プレーの上達には、今の自分を把握することがとても重要です。その点、この自動リプレイ装置は、一目で把握できますので、練習の質もかなり向上しました。今回のスポーツ振興支援金に部員一同とても感謝しています。ありがとうございました。

岐阜県立羽島北高等学校 サッカー部



この度は、貴奨学会の援助により、フットサルゴールを購入させて頂き誠にありがとうございました。
私達羽島北高等学校サッカー部は、普段本校に隣接する柳津町のグラウンドをお借りして練習していましたが、そのグラウンドが昨年9月より改修ということで、10月より野球部とハンドボール部と本校の狭いグラウンドを共有する形で練習をするようになりました。狭いグラウンドを約40名で活動する中で、トレーニング内容はミニゲームが必然として多くなり、今回購入させて頂いたフットサルゴールは大変重宝しています。ミニゲームをすることにより、狭いスペースでの状況判断や実践的な個人技術が鍛えられ、全国高校サッカー選手権では県ベスト16に進出し、新人戦では岐阜地区で優勝することが出来ました。チームの最大の目標は「全国大会出場」です。インターハイでより良い結果が報告できるように、部員一丸となって頑張っていきたいと思います。本当にありがとうございました。

岐阜県立恵那高等学校 ボート部

部長 吉村優里



いつも私たち恵那高校ボート部を応援していただきまして、ありがとうございます。特に昨年、貴奨学会の援助により新しいシングルスカル艇を購入できたことで、私はとても幸運に恵まれました。
昨年1月末、恵那峡に届いた新艇は、私たちのチームカラーである白地に赤のツートンカラーで、とても細くて軽く、小柄の選手が多い私たちにぴったりの艇でした。春のシーズン初めには、深津先輩が岐阜県高校ロングレガッタにこの艇で出場し、私と一緒に県内のライバル選手と競い合いました。その後先輩と私は2人でダブルを組んで、これも奨学会の援助で買ってもらったと伺っている「JPN＝ジャパン」のダブルスカル艇に乗ってインターハイを目差しましたが、5月末の県予選で敗れ、結局東海大会までしか勝ち上がる事が出来ませんでした。
6月の東海インターハイを最後に先輩が引退し、私は先輩から譲り受けた新しいシングルスカル艇で国体を目指すことになりました。その結果、6月末の県予選で県代表選手に選ばれ、7月半ばの国体東海ブロック予選で何とか2位に入り込み、私はあこがれの国体選手となることができました。私の母の故郷でもある新潟県で行われたトキめき国体では2年生ながら準決勝まで進むことができ、応援に駆けつけてくれた家族や親戚の声援に応えることができました。さらに、新しいシングルスカル艇で臨んだ県新人大会でも優勝することができ、駒を進めた中部選抜大会で5位に食い込んで3月に天竜で行われる全国選抜大会にも出場することができました。

ここまで私が結果を残せたのは、両親や先生、地域の方々に支えていただいて、厳しい練習を乗り越えることができたからだと思いますが、奨学会の援助で購入した新しいシングルスカル艇の力で勝たせてもらったことは間違いありません。同封の写真は、昨年10月に行われた中部選抜大会に出場したときの様子を撮ったものです。

新しい年を迎え、私は部長として大勢の1年生部員を率いながら、春の全国選抜大会や沖縄インターハイ、千葉国体での上位入賞を目標に頑張っていきたいと思います。これからも応援よろしくをお願いします。

時節柄、お体には十分気をつけて、貴奨学会がますます発展されることをお祈りしております。

奨学会からのお知らせ

平成22年度前期奨学金支給のための「生活学業状況報告書」の提出は4月1日～20日となっておりますので期限厳守で提出してください。

奨学金振込日の変更について

前期奨学金の振込日は、7月中旬となっておりますが平成22年度より5月中旬に変更いたします。
なお、後期奨学金の振込日は、今までどおり12月中旬です。

財団法人 伊藤青少年育成奨学会事務局

〒507-0062 岐阜県多治見市大針町661-1
TEL 0572-20-0800(直) FAX 0572-29-1168

E-mail: webmaster@ito-zaidan.or.jp
U R L: http://www.ito-zaidan.or.jp/

発行:財団法人 伊藤青少年育成奨学会
印刷:トーヨー印刷株式会社

伊藤青少年育成奨学会 奨学会だより

■伊藤青少年育成奨学会
設立10周年記念文化講演会が行われました
■奨学生の声の紹介
■スポーツ振興支援事業に関するお便りの紹介

2010.4.1
vol.10
年2回発行
(4月・10月)

シリーズ第10回
この本をあなたにも薦めたい

奨学会設立10周年記念 文化講演会開催

養老 孟司氏講演「子どもたちの未来のために」より抜粋 意識一人間の脳の奇妙な働き

<運動は頭を使う>

テーマは教育についてということですが、あまり広くなるので私はもっと基礎的なことをお話したいと思います。私は医学部を出て仕事は解剖でしたから、何を考えても結局体に行き着くので、体を基準にします。普通、教育の問題で皆さんがお考えになるのは、頭がどうのこうのということだと思います。これは体で言うと脳のこと、脳みそなんです。

人の脳みそは何をしているか。簡単に言うと、感覚から入ってきます。目とか耳とか信号が入る。入力と言いますか、五感ですね。運動で出てこれを出力と言っています。間で何をしているか。演算―論理・計算です。コンピュータの機能は完全に入力・演算・出力となっていて、キーボードから入力し、機械の中で勝手に演算が起こって、結果をモニターに出す。人の脳の中でも同じことが起きている。というよりもコンピュータが脳を簡単に真似をして作られたものなのです。このように脳の働きが3つある。

この演算の部分に特別な機能が出てまいりまして、これを意識と言っています。意識は、感覚だけでも、運動だけでもありません。真ん中に来る奇妙な働きです。意識がなくなるとなんにも話ができないし聞くこともできない。こういった働きが真ん中にある、これはコンピュータにはないんでしょう。調べられないからわかりませんが、ないということになっています。

教育の「知育」「徳育」「体育」という言葉はすごく古い言葉ですね。今は使わないと思いますが、実は見事に言いあらわしているんですね。脳みその入ってくるころ、これに関する教育を知育、演算のところに入ってくる教育を徳育と言って、最後にでいていくところを体育と言う。本当はそうだと思うんです。古臭いことってものすごく理屈に合っているんですよ。

出るところから説明しますと、皆さんは運動って勉強だとは思ってないのと違いますか?よくお母さん方がそんなに野球やってないでたまには勉強しなさいと言っています。要するに野球をやっているということでは体を動かしているということで、体を動かしている間は頭を使ってないと思われています。これは非常に大きな誤解で、明治以降非常に大きな誤解があったとすればそうです。

年輩の方はお分かりだと思いますが、昔の労働はきつかった。食べ物も十分ではなかったから、一日の労働のあとに食べると眠くなって寝てしまう。意識がなくなってしまふ。エネルギーを使っちゃうんですよ。脳も何もしてないようだけど、実はものすごくエネルギーを使っています。今は労働もきつくないし、食事也十分ある。昔は



講師 養老 孟司氏 (東京大学名誉教授)
平成21年10月18日恵那市文化センターにて

運動でエネルギーを使っちゃうと、脳にまわすものがなくなってしまったというだけで、決して体育、体を使っていることが頭を使わないことにはならないんです。

もし体を使うのは頭を使わないと思われる方は、今日から脳卒中になって頂きたい。そうすると、体は何ともないのに動かない。脳卒中になるとわかるんですが、体を動かすためには脳が動かないと動けないんです。

<体を動かさないと頭が働かない>

恵那は知りませんが、都会の人は一日中同じ固さの平らな地面しか歩いていません。ここは大きなホールですから、階段がずらしてありますが、普通は階段があっても全部幅と高さが同じ大きさになっています。慣れてくると目をつぶっても歩けるという状況です。しかも同じ固さの地面しかないからできるのです。昔の人は田んぼで動いている時も田んぼに入ったらずばっともぐってしまふし、あぜ道は柔らかい土で、道に上がると砂利があったり草があったり、いろんな固さの地面を毎日毎日踏んでいたんです。それによってその都度脳は調節(演算)して動いてるんですよ。

どうして今はどこへ行っても同じ固さの平らな地面にするんですか。それで運動不足だといって東京では日曜日なら皆さんが二重橋とか大手町皇居の辺を走っていますよ。あそこは24時間車の動きが止まらない。あんなに車が粉塵巻き上げているところでひたすら体のためと称して走っている気持ちかわからない。あの人たちの肺を見たら真っ黒ですよ。しかも下は同じ固さの平らな地面でしょう。あれを見るとカゴの中に飼われている二十日鼠が車を回しているのを思い出します。同じ動きしかしれない。つまり脳を使ってないんです、ああいう動きは。

体育に本当の意味で関心のある人はオリンピックの選手ではありません。実は、日本古来の武道をやっている人に、かなりそういう人がいると思います。そういう人たちの言うことを聞いたり、実際にってみると、極めてまともだと思います。体の使い方がちゃんとしていると、頭がまともに動きます。常識的な考えをします。

皆さんは体を動かしていないでしょう。特に地方に来ると門から門まで

奨学生の声

……………2009年11月までに提出された学業状況報告の一部です。

草場 勇作

山形大学医学部医学科2年(斐太高校卒)

1年生の講義はほとんどが一般教養です。本格的な医学教育が始まっておらず、目標を失う医学生も多いと聞きますが、私にとっては、自由な時間を有意義に使うことができていると感じています。

9月には、1日消防署で救急車に同乗させて頂くという実習があり、救急医療の現場に直に触れることができました。また、一般教養では、山形の郷土史、美術史、日本の外交問題など、様々な分野を学んでいます。一見、医学とは何の関係もない分野のようですが、学んでみるとそれぞれ異なる面白さがあり、刺激的で考えさせられることも多いです。医学との関わり云々ではなく、単純な知的好奇心から学んでいる状態

井戸 結加里

筑波大学理工学群工学システム学類2年(滝高校卒)

感動の多かった授業を紹介します。1つめは「宇宙工学」です。これは、宇宙工学分野を専門にされている先生や、JAXAで働いていらっしゃる方を招いて、それぞれの専門分野について講義をしていただくというものです。

まず、宇宙空間での活動の様子、方法を工学的な側面から学ぶことで、今まで自分の中で分かったようで曖昧になっていた、工学のもつ力(はたらき)というものを実感することができました。これからの宇宙利用にも工学が大きく貢献できるのだろうという期待がもて、工学を志す身として、とても楽しみです。それに、宇宙工学の講義では、常に自分の持ちうる知識を総動員させて臨む必要がありました。現在学んでいる基礎科目が、

古田 浩貴

名古屋大学工学部機械航空工学科3年(多治見北高校卒)

部活の学生フォーミュラへ、より一層積極的に参加をしています。9月に行われた全日本大会では、全63チーム中10位で、去年度より5つ順位を上げることができました。私はエキゾースト(排気)担当で、設計・製作を行いました。このエキゾースト新作により、エンジン出力を約15%引き上げることに成功し、大会でも優位に立てたものと思います。自分の創った物で大幅なパフォーマンスアップが生で実感できたときの快感は今ままで最高のものでした。他にも、学生フォーミュラでは、日本初となる、最適化ソフトOPTIMUSを使ったベルクランクというパーツの軽量化も行いました。誰も踏み入れたことのない領域で大きな挑戦であり、

伊藤 祐太

東京大学文学部英語英米文学科3年(岐阜高校卒)

今まで教養学部前期課程で理科一類として在学していた私が、進学先として、一般的に理科一類からの進学が多い工学部や理学部ではなく、文学部英語英米文学科を選択したことでしよう。これはひとえに、英文科で行われる講義や研究の内容が私にとって最も興味深く、学びたいという意欲を強く起こさせるものだと思われたためです。今後の具体的な進路選択はまだはっきりと決めてはおりませんが、3年生からの文学部における学生生活を通して考えていこうと思っています。

さて、文学部で、英文科で、一体どのようなことを勉強しているのかということをよく他学部の友人から尋ねられますが、英文科では何世紀も昔のものから現代のものに至るまでの英語で書かれた様々なタイプの小説や詩、そしてそれらに関して研究者や評論家が著述してきた論文を読み、それらに関して考え、議論する、というのが主な内容だといえるでしょう。もちろんそこには様々な社会問題(たとえば、人種、民族、政治など)が関わってきますが、肝要なのはそれらの状況下である生き方に従って生きる人々の感情、心情、気持ちの機微ではないかと思えます。文学はそういった人の感情や精神について考える学問ですから、一見狭く限られた領域についてしか学べないように思われながら、自己の内面の成熟につながる広範に応用の効く学問ではないかと私は考えています。

また、文学というのは、自然科学などの他の学問に比べ、その学問の

<交換する能力は人間だけ>

人間しかやらないことは、この「同じ」という能力に頼ってる。算数で言えば同じはイコールじゃないですか。右辺と左辺が同じ。だから小学校から習うんで12÷8=4ってやってるでしょう。これはわかる。中学校で方程式を解くとx=8という答えが出てきたり、a=bというのが出てくる。ここで代数やめた、算数やめたという人がいるでしょう。そう思う人の気持はよくわかるんですよ。おかしいですよ、これ。xは8じゃないし、aはbじゃないですよ。aがbなら明日からbって字はいらないんで、aと書けばいい。そう思いませんでしたか、習った時に。

aとbは目で見る感覚でとらえるんです。ちゃんと違うように作ったんだから。=というのは意識の中、頭の中にしかないんです。「同じ」って頭の中にしかないんですよ。それを動物が持っていないから動物を馬鹿にすることはないんです。ずいぶんいろんな問題起こっているんですから。この=がないから、動物は一番人間の社会にとって重要なことができないんです。それは交換です。恵那のサルはちょっと利口で変わってて、山からウサギの死んだの拾ってきて、犬が畑からきゅうりのおこったの拾ってきて、両方であそこ取り替えた。そういう動物市場があったらすごい。便利でしょう。自分の食べないものを見つけてあいつなら食べるなど思ったらそれ拾って、たまたまウサギ捕まらなくても年寄りの犬でも生きていける。きゅうりにとって市場に持っていけば、でも動物にはできないんです。唯一やる動物が人間です。市場でやる交換は、相手にとって必要ということで、これが一番人間社会で重要な能力なのです。

相手からみることができ。自分と相手を交換する。広い意味の同じという能力なんですよ。そこから発生しているのがお金なんです。お金は交換のための尺度ですから。動物は絶対お金を使いません。あれは算数ができないとか、勘定ができないからではないんです。お金のものを理解できない。なぜなら交換が理解できないから。チンパンジーのようなりこうな動物でも交換はできないんです。

<相手の立場に立つ能力>

アメリカ人の研究所でも変わった人がいて、自分の子供が生まれたときちょうどチンパンジーの子が生まれたのを引き取って養子にしました。兄弟同様に育てたんですよ。3歳まではチンパンジーの方が何やらせても上なんです。敏捷だし、身体能力高いですから。ところが4歳過ぎるとたちまち人間が優秀になってくる。理由は簡単なことができないんです。相手の立場に自分を置いて世界を観察するということが出来ない。どこまでいっても自分中心でしかない。自分の見方しかないのがチンパンジーの世界です。だから結局腕力になって強い方が勝つんですけど、相手だったらこうするなと、だからこうなっているんだなと思わないんです。常に自分です。人間の世界でも最近そういう人が増えているような気はしますが。

とにかくそれも交換だということがおわかりですね。相手と自分の立場を入れ替えることができるようになる。人間は4歳の半ばくらいから。それで人間の社会はチンパンジーの社会と全く違ってきます。ですからそれは脳の意識の機能です。そういう風にしてレビストロースという文化人類学者は人類社会は交換から始まると言ったんです。ある意味その通りなんです。交換のためには「同じ」という能力が必要だということです。



養老 孟司氏
東京大学名誉教授
著書:ベストセラー「バカの壁」をはじめ「唯脳論」「からだの見方」他多数

車を使っています。歩かない。地面を目の敵にして全部アスファルトでうめちゃってカチンカチンにして同じ固さにして、その上を目をつぶって歩いています。これを私は運動とはいいません。それをやっていると体の動きが単調になる。実は頭を使わなくなるということです。体を動かすと言うことは脳の中にプログラムを作っていくんです。プログラムを入れないと歩けません。人間も同じです。田んぼも歩けません。

歩くことを覚えるのは足が覚えるんじゃないんですよ。それをやっているのは脳みそです。コンピュータはソフトを入れないと動きませんが、人間では脳の中にひとりでにできてくるんです。歩かなければでききません。そこなんです。脳は自動的にプログラムを作る機械なんです。そのためには入力して出力してというその作業が回っていかないとけない。変わった入力に合わせて行動を調節するということを脳がやっているんです。これを繰り返しやっていきますと、脳の中にプログラミングができてくる。だから全く動かないでパソコンの前に立っている人は非常に古いプログラミングのまま固定されている。今の若い方はほとんど固定されているのではないかと思います。

<同じであると認識すること>

知育の方なんです。感覚は、目も耳も鼻も一緒にして全体で何をしてるんですか。外の世界を把握してることに間違いはないですね。何をしているのか。違いをみているんです。音が聞こえていると言うことはそれまでその音はなかったんですよ。間にずっと誰かが同じ大きさで喋っていたら何が何だかわからなくなっちゃう。結局感覚が違いを捉えるんだということがよくわかる。ところが意識が入ると同じにしてしまうんですよ。

動物と人間の一番大きな違いはおしゃべりができるかできないかです。私は何代もネコを飼っていますが、言葉をしゃべったネコは一匹もいません。犬は家族のそれぞれが別な名前呼んでると思っていると、私は思うんですよ。なぜなら人の声はそれぞれの高さが違うから。耳は元来音の高さを判断する器官なんです。カタツムリ管のつくりを見ればわかる。カタツムリ管の中に入っている膜が共振するんです。共鳴するんですよ。高さによっては違う。だから音の高さがわかるんです。だけど奇妙なことに人間には音の高さが絶対的にはわからないんです。わかる人は絶対音感があるといえます。それがあればカラスが鳴いた時ピアノで伴奏できます。カラスの声の高さがピアノのここだとわかるからです。そのかわり、絶対音感のある人は半音ずれたピアノがあると、自分が知っている聞きなれた曲をひいても、全く違う曲に聞こえます。犬がシロだとして、お父さんは低い声でシロ、お母さんは高い声でシロというと、犬にとっては違う言葉なんです。

ここに字を同じ字を2つ書きます。色も違うし大きさも違うのに、動物にしてみればどこが同じなんだというでしょう。言葉とは「同じ」という何と乱暴な能力の上に成り立っているのでしょうか。ここにいる方は一人ひとり顔が違う。だからこれ全部違う動物だと動物は思うでしょう。人間はどうするか。恵那市の市民とか、人とか一言で同じにしちゃうんですよ。これってものすごく乱暴な能力だとわかるでしょう。説教する時近頃の若い者とはいうと、隣の学生をつついて「先生こいつと一緒にしないで下さい」と言われました。そうやってすぐ一緒にするんですよ。それが僕と同じという意味です。そうやってあるときから絶対音感があると言葉を理解するのに不自由になるはずだと。いっそのこと感覚中心の世界を忘れてしまって、シロと言われたらどんな高さでもシロと理解するようにしよう。そういうふうには音の高さも絶対的にわかんない方がいいんです。高い声で言われようが低い声で言われようが「同じ」ってことです。そうなっちゃった人のことを簡単に音痴と言っていますが。